

「アイアイ唱」を用いた歌唱指導の効果

上野 正人*

(令和6年10月7日受付；令和6年10月23日受理)

要 旨

本稿の目的は、筆者が歌唱・合唱指導で用いている練習方法の一つ「アイアイ唱」¹による指導の効果について、アンケート結果をもとに分析および考察を行い、その有効性について明らかにし、この指導法を有効な指導方法の一つとして提案することにある。学習指導要領音楽（平成29年告示）では、小学校、中学校とも共通して「技能」を身につけることの重要性が謳われているが、そうした技能を育成するための方法については教師の力量に委ねられる。しかし、すべての教師がその指導に適う専門性を有しているわけではない。そこで、筆者が用いており、その有効性を実感している指導法の一つである「アイアイ唱」を用いた歌唱指導法の提案のために、実際に指導を行った中学校生徒へアンケート調査を行い、その効果について分析・考察を行った。その結果、「とても良くなった」、「良くなった」と合わせて48名（86%）の生徒が、歌唱の改善を実感していることが明らかとなった。また、良くなったと感じた点についての設問では、「発声」44名（79%）、「音程」22名（39%）、「リズム」15名（27%）、「表現」13名（23%）であった。この分析からは、「アイアイ唱」を用いた歌唱指導が、主目的である発声の改善に効果があるとともに、さらにリズム、音程、表現と歌唱全体の改善にその効果が及ぶことが明らかとなった。この結果から、筆者は「アイアイ唱」を用いた歌唱指導法を、歌唱における有効な指導方法の一つとして提案するとともに、教師には、歌唱において学習者の不安材料となる技能不足を解決するための効果的な練習方法のさらなる開発が必要であると考えた。

KEY WORDS

Gesang 歌唱, Fähigkeiten 技能, Schulmusikabteilung 学校教育音楽科, effektive Übungsmethoden 効果的な練習方法

1 はじめに

本稿は、筆者が歌唱・合唱指導で用いている練習方法の一つ「アイアイ唱」¹を用いた歌唱指導の効果について、アンケートをもとに分析および考察を行い、その有効性について明らかにするとともに、有効な指導方法の一つとして提案することを目的とするものである。

筆者は、着任以来、小学校、中学校、高等学校、一般と様々な個人・団体の指導を行ってきた。演奏能力はそれぞれ違いがあり、筆者はそれぞれの技量に応じた指導を行っている。その中でどのレベルにおいても共通で用いる指導法の一つに「アイアイ唱」がある。「アイアイ唱」とは、1音ごとに「アイアイ・・・」と交互に歌う方法で、発声の改善を目的として筆者が考案し用いている。実際にその方法を用いての指導では、目的としている発声技術の改善の他に、音程、リズムにも改善が見られることを実感している。

学習指導要領音楽（平成29年告示）では、小学校、中学校とも共通して「技能」を身につけることの重要性が謳われているが、そうした技能を育成するための方法については各教師の力量に委ねられる。教師の力量は、各教師の学習経験や専門性、経験に委ねられるが、すべての教師がその指導に適う専門性を有しているわけではない。そこで、筆者が用いており、その有効性を実感している「アイアイ唱」を用いた歌唱指導法について、実際に指導を行った中学校生徒へのアンケート調査をもとに、その効果について分析を行うことでその有効性を明らかにし、この指導法を有効な指導方法の一つとして提案したい。

*副学長／芸術・体育・教科横断・総合教育学系

¹アイアイと交互に歌う筆者が歌唱指導の中で用いている練習方法。筆者が分かりやすいように名付けたものである。アンケートでは「アイアイで歌う練習」と表記している。

2 具体的な指導法の必要性

平成29年告示の学習指導要領音楽では、教科の目標として小学校では、「(1)曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにする。」²とあり、中学校では、「(1)曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにする。」³と技能の必要性について示されている。また、歌唱における「技能」について、小学校学習指導要領解説音楽編では、「歌唱では、聴唱や視唱などの技能、自然で無理のない歌い方で歌う技能、声を合わせて歌う技能」⁴、中学校学習指導要領解説音楽編では、技能については「2 各領域及び〔共通事項〕の内容 (1) ④音楽の表現における技能」に書かれているが、その部分から歌唱に関する部分を抜き出すと「発声や発音」「身体をコントロールし、姿勢、呼吸法、身体の動き」⁵と解説されている。

ここで解説されている小学校での技能に示されている内容のうち「聴唱や視唱などの技能」とは、聴いて正しい音程を把握し歌ったり、楽譜から音を読み起こして歌うこと、すなわち読譜の能力などソルフェージュ能力と結びついた歌唱技能を指し、「自然で無理のない歌い方で歌う技能」とは、書かれている通り発声の技能をさしている。また「声を合わせて歌う技能」とは、聴取により正しい音程を把握し、正確に歌うソルフェージュ能力と結びついた歌唱技能であり、これらは全て、ソルフェージュ的な能力を表現することのできる発声技能と一体であるものである。また中学校では記述の通り、「音楽で表現したい思いや意図」⁶を実現させることができる発声の技能と述べている。

では、教師はそうした能力をどのように育てていけば良いのだろうか。学習指導要領解説の中には、そのための具体的な指導方法は示されておらず、そうした指導方法は教師の資質・能力、経験に委ねられている。教師自身が声楽経験を有し、多くの指導経験を有しているならば、それまでの経験から、示されている育成すべき技能について、その具体的に意味する内容や育成するための方法について、それぞれの能力に応じたアイデアが生まれると想像するが、自身が声楽を専門とせず、また指導経験がまだ浅い教師にとっては、その内容や方法について、そして目の前の学習者の歌唱がどのような状態にあり、どこをどのように指導していけば良いのか等、学習者の状態を的確に把握し、指導していくことに迷うだろう。

そこで必要になるのは、実際に指導で用いられ、その効果が実証されている練習方法であり、その指導方法は、教師のみならず学習者も自主練習やグループ練習でも容易に取り組むことができ、かつ効果が感じられるものであることが必要であると考えている。

3 アイアイ唱とは

アイアイ唱とは、先述したように、歌唱・合唱指導で用いている練習方法の一つでアイアイと交互に歌う歌唱練習法のことである（譜例1）。

譜例1 文部省唱歌《春の小川》の冒頭部分の例

アイアイ アイアイ アイアイ アイア イアイア イアイア イアイア

この練習は、発声法の改善を目的として始めたものである。練習時には、イメージの喚起を目的として、学習者に、「アは開く（あくびの喉）、イは声を集める」と声がけをして、顎や口を柔らかくかつ活発に動くように意識を促している。「ア」母音は、開放感のある母音、「イ」母音は口を閉じるがその分、声のポイントが正しい位置に意識しやすく、かつ声を集める⁷というイメージがつかみやすい。この2つの母音を交互に歌うことで、活発かつ柔らかく

²文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』株式会社東洋館出版社、2018、p.9

³文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』株式会社教育芸術社、2018、p.9

⁴前掲書、pp.12-13

⁵前掲書、p.26

⁶同上書、同ページ

⁷筆者は声を響かせるポイントを顔の前、鼻のあたりと意識している。

口を開き、かつどの母音でも声のポイントを一定に保つことができるようになると考えている。実際、指導場面でもそのように指導することによって、狙った通りの効果が出ていることを実感している。

4 アンケート調査結果とその分析・考察

ここでは2020年10月16日にT市立M中学校で行った出前講座「歌唱・合唱講座」後に実施したアンケート結果の分析を行い、その結果について考察を行う。割合の数字は小数点以下四捨五入としている。実施したアンケートの設問は、「アイアイ唱」の他に筆者が指導の場面で用いている「リズム打ち」についても含まれているが、本稿ではそのうち「アイアイ唱」を用いた歌唱指導について分析と考察を行う。また、自由記述部分はユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>)⁸による分析を用いる。なお、自由記述においては、明らかな誤字や同じ言葉でひらがなの表記と漢字の表記が混在している場合には、精度を上げるために誤字については修正し、また表記は漢字に統一している。

4.1 アンケートの概要

実施校の全生徒数、受講者人数及びアンケート回答者数は次のとおりである。

表1 実施校の全生徒数、受講者人数及びアンケート回答者数

学年	生徒数	回答者数(当日参加者)
1年生	15	14
2年生	19	18
3年生	26	23
無回答		1
合計	60	56(無回答1を含む)

実施校の全生徒数は60名、そのうち当日の講習に参加した生徒は56名、アンケートは56名から回収し、1名は無回答であった。回収率は、98%であった。

アンケートの内容は、筆者が歌唱・合唱指導で用いる「リズム打ち」、「アイアイ唱」に関する内容について、受講した生徒がどのように感じたかを調査する内容である。本稿では、そのうち「アイアイ唱」に関する部分について分析・考察する。

4.2 「アイアイで歌う練習」アンケート調査結果とその分析・考察

2. 「アイアイで歌う練習」について

Q4 「アイアイで歌う練習」をすることで自分の演奏はどう変わりましたか？

とても良くなった 良くなった 変わらなかった 悪くなった とても悪くなった わからない

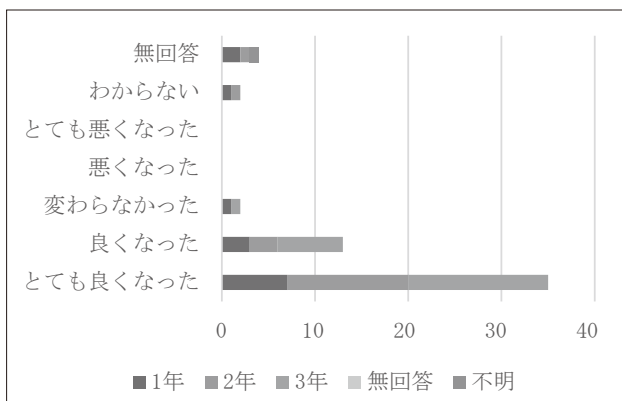


図1 Q4の回答

⁸ユーザーローカル テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>)

図1 「Q4「アイアイで歌う練習」をすることで自分の演奏はどう変わりましたか?」の設問では、「とても良くなった」35名(63%),「良くなった」13名(23%)と合わせて48名(86%)の多くの生徒が、この練習方法によって自分の歌唱が改善されたことを実感していることがわかる。

次のQ5は、どこがどのように良くなったか、その具体についての設問である。

Q5 「とても良くなった」、「良くなった」と答えた人にお聞きします。どこがどのようによくなりましたか。当てはまるもの全てにチェックをして、さらに下のカッコに具体的に書いてください。
リズム 音程 発声 表現

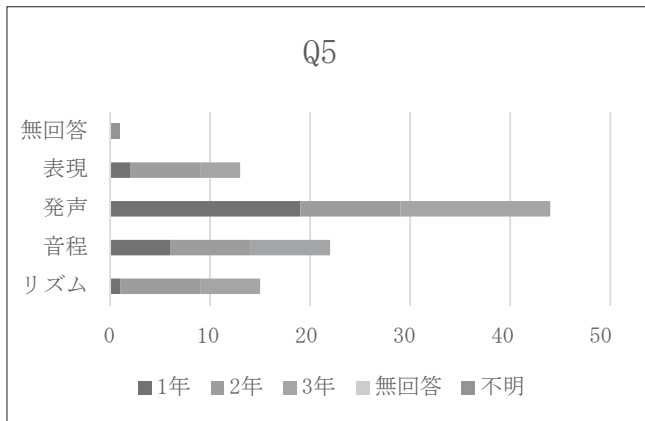


図2 Q5の回答

Q5で最も回答が多かったのは、各学年とも「発声」で、全体で44名(79%)である。このことは、多くの生徒がアイアイ唱によって自分たちの歌唱技能のうち「発声」がよくなったことを実感していることを示している。これは発声の改善というねらい通りの効果があることを示す結果となっている。

次に多いのが「音程」22名(39%)である。この結果について、筆者は生徒たちの発声改善され声が出しやすくなったことから、音程も必然的に改善されたものだと捉えている。

ついで「リズム」15名(27%)である。この結果については、「アイアイ唱」は1音ごとに「アイアイ・・・」と交互に歌うことから、自ずとリズムもはっきり意識できるようになる効果があることを裏付けていると考えている。

次に「表現」13名(23%)と続く。この結果は、発声改善され声が出やすくなったことから歌唱における不安要素の一つが改善され、それまでよりもストレスなく思い通りに歌えるようになっていることを示していると考えられる。

次にQ5の自由記述について分析を行う。ここでは、回答数が多いことから学年ごとに分析を行う。

まず、1年生のQ5における自由記述では、次のような結果が出ている。

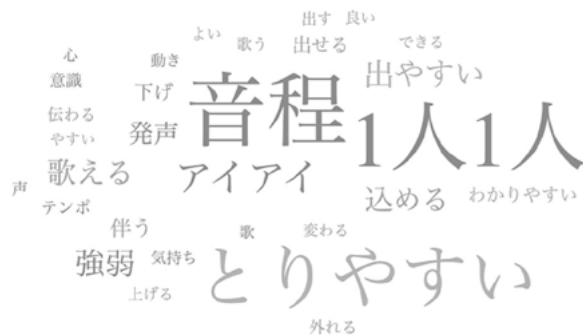


図3 Q5自由記述 1年生 ワードクラウド (スコア順)⁹⁾

⁹⁾スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示している。スコアは、その単語の「重要度」を表す値のこと。単語ごとに表示されている「スコア」の大きさは、与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表している。(https://textmining.userlocal.jp/questions#data_q2を参照)。

ここでは「音程」「1人1人」「とりやすい」が大きく表れ、「アイアイ」「出やすい」「歌える」と続いている。「音程」に関しては生徒の記述「音程がとりやすくなった」「声も気持ちを込めて出せるようになったし、音程も外れなくなった」の中に書かれているもので、この練習の狙いである、発声の改善によって、音程を正しく歌うことができるようになった効果を生徒自身も感じていることがわかる。

また「アイアイ」はこの練習方法、「出やすい」「歌える」については「音程を意識することができた。はっきりと声を出したり、強弱を意識できるようになった。気持ちを込めて歌えるようになった」の記述に現れているように、発声の改善によって声が出しやすくなったことが音程の正しさを生み出し、またそれらによって生徒自身が気持ちを込めて歌えるようになっていくという効果を導いていることがわかる。

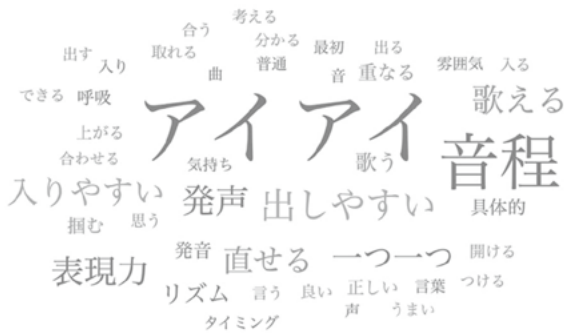


図4 Q5自由記述 2年生 ワードクラウド (スコア順)

ここでは、「アイアイ」「音程」が大きく現れている。「アイアイ」はこの練習方法だが、「音程」については、生徒の記述「しっかり音程が取れるようになった」に代表されるように、正しい音程で歌えるようになったことを生徒たちが実感していることを示している。

次いで「歌える」「入りやすい」「発声」「出しやすい」「直せる」「表現力」については、「発声が良くなり、表現力も少し上がり、気持ちが入りやすくなった」「リズムがよくなった。音程も正しい音程に直せた」との記述にも見られるように、発声が良くなり、正しい音程で歌えるようになったことで「気持ちが入りやすくなり」「表現力」が上がったことを実感していることを示している。また、この練習法によって1年生同様自分の音程を修正できたことを生徒自身が実感していることも重要である。

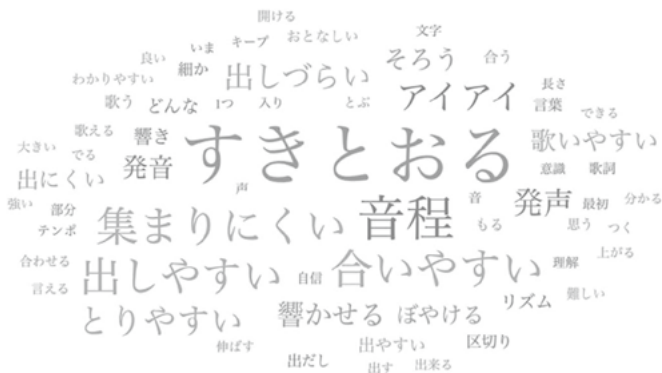


図5 Q5自由記述 3年生 ワードクラウド (スコア順)

ここでは「すきとおる」が大きく現れている。この言葉は生徒の記述「とても声がすきとおって大きくなった」と、声が出しやすくなり、綺麗な響きで歌えるようになったこと、すなわち発声が改善され、よく歌えるようになった実感が述べられたものであると考える。

次いで「音程」「出しやすい」「合いやすい」と続いている。この言葉は、「どこがもり上がり、どこがおとなしくなるのか「ア」「イ」と発音によって細かな合わない音が合うようになった」、「発音が良くなったと思った。声が出しやすく、音程が合うようになった」との記述に見られるように、発声が改善されたことで「声が出しやすくなり、これにより正しい音程で歌えるようになったことを実感していることがわかる。同時に「ア」「イ」と発音によって細かな合わない音が合うようになった」にあるように、「ア」と「イ」を交互に歌うことでリズムがよりはっ

きりと認識されることから「合うようになった」ことを実感していることもわかる。このリズムに関して「テンポキープが出来るようになりました」という記述からもわかる。「とりやすい」は「歌詞が聞きとりやすくなった」というように、発声、音程、リズムがはっきりしたことで、そのように感じていると考えられる。これについては他に「言葉をハッキリと出すことができた」「言葉の区切りがわかりやすくなった」からもわかる。また「集まりにくい」は、「音の集まりにくい「ア」の発音がよくなりました」にあるように、発声が改善されたことにより、声が出しやすくなり、発音にも好影響を与えていることを示していると考ええる。

Q6 「悪くなった」、「とても悪くなった」と答えた人にお聞きします。どこがどのように悪くなりましたか。当てはまるもの全てにチェックをして、さらに下のカッコに具体的に書いてください。

リズム 音程 発声 表現

回答なし

「アイアイで歌う練習」で他に気がついたことがあったら書いてください。



図6 Q6「アイアイで歌う練習」その他 1年生 ワードクラウド (スコア順)

ここでは「アウ」がトップに来ているが、この言葉は「アウも良いかもしれない」という練習内容のアイデアについて記述したものである。「アイアイ」に関しては「「アイアイ」で歌う、前と後では全然違う人が歌ったようになった」との記述にあり、この練習を通して歌唱全般が改善されたことを実感している様子が伺える。



図7 「アイアイで歌う練習」その他 2年生 ワードクラウド (スコア順)

ここでは「つかみやすい」が大きく、ついで「歌いやすい」「音程」「響かせる」となっている。「つかみやすい」とは、「音程やリズムが、つかみやすくなった。ズレているところが、アイで歌ってわかった。」との回答にある言葉である。この回答にあるように音程がとりやすくなったとの回答は、この設問の全7回答中3回答に上る。この回答からも分かるように、「アイアイ」が「音程」の改善に効果があることを生徒が実感していることがわかる。さらにリズムが掴みやすくなったとの回答から、リズム把握の理解にも効果があることがわかる。この練習を通して、発声だけでなく音程、リズムをしっかりと把握し、自信を持って歌えるようになったことが、声を「響かせ」て歌えるようになったという実感につながっていることがわかる。



図8 「アイアイで歌う練習」その他 3年生 ワードクラウド (スコア順)

ここでは「デクレッシェンド」「付けやすい」が大きく現れている。この言葉は「アイアイ」で歌うことで抑揚が付けやすくなった。(クレッシェンドやデクレッシェンド、サビのMAXをどこにもっていくかなど)の回答にある言葉で、この練習を通して表現が付けやすくなったことを示している。他の回答にも「発声がとても良くなり、笑顔で上手く歌えるようになりました」、「リズム、音程がすごく分かりやすいなと思いました」、「口の開け方や発声を意識することでその歌に合った歌い方を見つけることができました」とある。これらは、声がより出しやすくなったことによって、生徒たちはより自在な表現の可能性を見出していることを示していると考えられる。これらのことからわかるように、この練習方法は、発声や音程、リズムの改善だけでなく、表現を含む歌唱全体にその効果が及んでいることを示している。

5 おわりに

本稿の目的は、筆者が歌唱・合唱指導で用いている練習方法の一つ「アイアイ唱」を用いた歌唱指導の効果について、アンケート結果をもとに分析および考察を行い、その有効性について明らかにし、この指導法を有効な指導方法の一つとして提案することにある。

学習指導要領音楽(平成29年告示)では、小学校、中学校とも共通して「技能」を身につけることの重要性が謳われているが、そうした技能を育成するための方法については各教師の力量に委ねられる。教師の力量は、各教師の学習経験や専門性、経験に委ねられるが、すべての教師がその指導に適う専門性を有しているわけではない。そこで、筆者が用いており、その有効性を実感している指導法の一つである「アイアイ唱」を用いた歌唱指導法の提案のために、実際に指導を行った中学校生徒へのアンケート調査を行い、その効果について分析・考察を行った。その結果、Q4では「とても良くなった」35名(63%)、「良くなった」13名(23%)と合わせて48名(86%)の生徒が、歌唱の改善を実感していることが明らかとなった。

また、Q5において、「とても良くなった」、「良くなった」と答えた生徒に、どこがどのように良くなったかを問う設問では、「発声」と答えた生徒は79%であり、練習の狙い通りの結果であったとともに、「音程」22名(39%)、「リズム」15名(27%)、「表現」13名(23%)といずれの要素にも歌唱が良くなったことを実感していることが明らかとなった。この要因として、発声の改善を主目的としたこの練習方法が、同時に音程、リズム、表現の改善にまで効果をもたらした、また学習者がそれを実感していることが明らかになった。

この分析を通して練習方法の効果とともに筆者が着目した点は、自由記述の中で頻繁に用いられる「できるようになった」という言葉である。この言葉は裏を返せば、これまではそこに達することができなかった、すなわち生徒たちが「こう歌いたい」ということになかなか達することができなかったことを示していると考えられる。そして、この練習を通してそうしたそれぞれが感じていた歌唱に対する技能不足が改善されよりよく伸びやかに歌えるようになったことを示していると考えられる。

このことから筆者が感じることは、授業等において学習者である子どもたちが十分に歌えない原因は、それを阻害する原因があり、そうした歌唱に対するもどかしさや難しさ、その原因を判断し、取り除くことが教師にとって必要な能力であることである。そうした取り組みが、学習者にとって充実した歌唱の時間を過ごすことができることにつながる。それは、先述した生徒たちの記述、「発声がとても良くなり、笑顔で上手く歌えるようになりました」、「リズム、音程がすごく分かりやすいなと思いました」、「口の開け方や発声を意識することでその歌に合った歌い方を見つけることができました」に現れている。

声を出すということそのものにメンタル的な問題も介在することもあると考えるが、ほとんどの場合、自己の思いを実現する歌唱技能の不足が学習者のストレスとなり、それが結果として歌唱が充実したものにならない大きな原因であると考え。そうした原因を払拭するためにも、先述したように歌唱授業において教師に求められる能力とは、目の前の学習者がどのような状態にあるのかを素早く判断し、どのような方法を用いればそれが改善され、不安要素が払拭されるのかを見抜き実践する能力であると考え。そして、そうした場面で用いるべき練習方法は、学習者が容易に取り組む事のできる平易さを持つ効果的な練習方法である事が重要であると考え。

また、ここで注意すべきは、練習に際して、学習指導要領にもあるように、技能の習得に関してどちらか一方を重点的に行えば良いというものではない。両者をバランスよく、常に表現練習と結びつけ指導を行うことが大切である。そうすることで技能と表現双方が共に成長していくと考える。この方法によって歌唱技能がソルフェージュ面と共に整ってくれば、学習者である子どもたちの歌唱が自ずと表現へ向かっていくことを教師は実感するだろう。技能と表現。その両者はこのようにして螺旋状に向上していくものである。教師は、少ない時間の中でも、こうした技能面の指導をおろそかにせず、短時間でもしっかりと取り組むこと必要であり、そうした指導が学習者の歌唱能力を引き上げることにつながると考える。

引用及び参考文献

- (1) 文部科学省, 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』株式会社東洋館出版社, 2018
- (2) 文部科学省, 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』株式会社教育芸術社, 2018

Auswirkungen des Gesangsunterrichts mit „Aye-aye -Gesang“

Masato UENO*

ABSTRACT

Der Zweck dieser Arbeit besteht darin, die Wirksamkeit des Unterrichts mit „Aye-aye-Gesang“, einer der Übungsmethoden, die der Autor im Gesangs- und Chorunterricht anwendet, auf der Grundlage eines Fragebogens zu analysieren und zu diskutieren, um seine Wirksamkeit zu klären. Ziel ist es, die Wirksamkeit dieser Lehre zu verdeutlichen.

Die Lehrplanrichtlinien für Musik (veröffentlicht im Jahr 2017) betonen die Bedeutung des Erwerbs von „Fähigkeiten“ sowohl für Grund- als auch für Mittelschulen, aber die Methoden zur Entwicklung dieser Fähigkeiten hängen von den Fähigkeiten der Lehrer ab.

Allerdings verfügen nicht alle Lehrer über die nötige Fachkompetenz zum Unterrichten.

Um eine Lehrmethode vorzuschlagen, die der Autor verwendet und für effektiv befunden hat, führte der Autor daher eine Fragebogenumfrage unter Schülern der Mittelschulen durch, die der Autor tatsächlich unterrichtet hatte, und analysierte und betrachtete deren Wirksamkeit.

Als Ergebnis wurde deutlich, dass 48 Schüler (86 %) das Gefühl hatten, ihr Gesang habe sich verbessert, darunter auch diejenigen, die mit „Sehr viel besser“ und „Verbessert“ antworteten.

Darüber hinaus antworteten 44 Personen (79 %) auf die Frage, in welchen Bereichen sie sich ihrer Meinung nach verbessert hätten, „Stimme“, 22 Personen (39 %) „Tonhöhe“ und 15 Personen (27 %) „Rhythmus“ und 13 Personen sagten „Ausdruck“ (23 %).

Diese Analyse zeigt, dass Gesangsunterricht mit „Aye-Aye-Gesang“ wirksam zur Verbesserung der Vokalisierung beiträgt, was das Hauptziel ist, aber auch zur Verbesserung von Rhythmus, Tonhöhe, Ausdruck und Gesamtgesang.

Basierend auf diesen Ergebnissen schlägt der Autor den Unterricht mit „Aye-aye-Gesang“ als eine der wirksamen Lehrmethoden für Gesang vor und schlägt außerdem vor, dass Lehrer wirksame Methoden anwenden können, um den Mangel an Fähigkeiten zu beheben, der bei den Lernenden Ängste hervorruft. Halten es für notwendig, eine Übungsmethode zu entwickeln.

* Vice President/Music, Arts, Physical, Cross-Curricular and Integrated Education